

力の係結びとム系推量の助動詞の共起について

新里瑠美子

ジョージア工科大学

Abstract:

On the co-occurrence of *ka*-type *kakari musubi* construction and the auxiliary of inference, *mu*

This paper concerns the *ka*-type *kakari musubi* construction (whose derived form in Modern Japanese is the interrogative *ka*) in Old Japanese in the Nara period. The co-occurrence of this construction with the *suiryō no jodōshi* (inferential auxiliary), *mu*, or its corollary, *ramu*, and *kemu*, have been noted widely in the literature. Using *Manyōshū* as data, this paper examines both co-occurrence and non-co-occurrence of *mu* with the *ka*-type *kakari musubi* construction. It explains co-occurrences in terms of their epistemic proximity, such as the uncertainty of the speaker. Cases of non-co-occurrence can be divided into three types based on whether the construction expresses: (1) the causal inference; (2) rhetorical interrogative; or (3) regret. It argues that the epistemic scale proposed in Akatsuka (1985) is useful to explain all these cases in a unifying manner. They represent different speaker attitudes, that is, "the speaker's subjective evaluation of the ontological reality of a given situation" (Akatsuka, 1985: 635-36) in a continuum of the two conceptual domains, *realis* and *irrealis*.

1 はじめに

係結びとは文中に用いられた係助詞により、結びと呼ばれる文末用言が特定の活用形で終わる呼応現象のことである。ゾ、ナム、ヤ、カの係助詞は連体形と結び、コソは已然形と結ぶ。例えば、下記において、通常の文が終止形「つ」で終わっているのに対し、係結び文は係助詞により連体形「つる」で終わっているのに注目されたい。

通常文

越の海の手結が浦を 旅にして 見ればともしみ 大和惚ひつ (=終止形) (367)¹
 (越前の海の手結の浦を 旅にあって 見ると慕わしいので 大和を惚んだ)

係結び文

妹も我も 一つなれ (加) も 三河なる 二見の道ゆ 別れかねつる (=連体形) (276)
 (妹もわたしも 一つであるからか 三河国の 二見の道から 別れられない)

係結びには強調、疑問、反語などの機能があるとされる(松村1971)。係結びは平安時代に最も法則化されて使われるが、その後、連体形が終止形を駆逐するという歴史的变化ゆえか、江戶時代までには衰退してしまう(尾上1982)。ただし、沖縄方言においては今なお健在である(Shinzato 1998; Serafim and Shinzato 1999)。

カの係結びに関する先行研究は、その起源に関する研究(大野1993;坂倉1993;Quinn 1997など)、カの係結びの意味・機能の研究(大野1993;Hangstram 1998など)、ヤの係結びとの意味・機能の比較対照研究(大野1993;坂倉1993)、ム系の推量の助動詞(ラム、ケム、マシなど)との共起についての研究(高山1988;山口1989;大鹿1991)と纏められるかと思う。

本稿では、万葉集を資料に、カの係結びとム系推量の助動詞との共起の有無について調査・分析を試みるのであるが、そのためには、カの係結びの意味・機能の分析にも必然的に関わることとなる。更にム系推量の助動詞の共起が何を意味するかを考察することで、カの係結びの日本祖語における原形にも触れることになり、上記の先行研究のいずれの分野とも接点をもつこととなる。

2 カの係結びと推量の助動詞ムの意味・機能

大野（1993：259）に指摘されるように、カの係結びの意味・機能に関しては「あゆひ抄」にヤの係結びと比較対照した次の記述がある。

おほよそ疑ひの脚結さまさまに継ぎて詠めど、その本はただ「や」「か」の二つなり。「や」「か」二つながら里言にくか>と当てたるによりて感ふ人多し。…すべて里言にくか>と言ふにく思ふか><問ふか>の二つあり。<思ふか>は「か」に当り、<問ふか>は「や」に当れり。…とかく思はれて定めかねたるを思ふといふ。むげに知らぬ事をば問ふといふ。

大野（1993）は、「あゆひ抄」に指摘された上記の違いを、カが疑問詞を受け、ヤが疑問詞を受けないことがないという構文上の違いに対応するとみている。つまり、カが受けるものは判断不明の事態であるに対し、ヤが受ける内容は話者が成立した事態との判断を下し、その是非を相手に問うていると解釈している。本稿との関連で興味深いのは、特にカとヤの双方が推量の助動詞と共起する場合について以下のような違いを指摘している点である。カの場合が妻の胸中不安の表明であるのと対照的に、ヤの場合は夫の側の安心と自信の表明であると説く。²

ながらふる妻吹く風の寒き夜にわが背の君は独りか寝らむ（59）

「（夫を待って）空虚な日を送る妻を吹く風の寒い夜に、わが夫はやはり独りおやすみであらうか。」

荒磯やに生ふる玉藻のうちなびき独りや寝らむ吾を待ちかねて（3562）

「荒磯に生える玉藻のようにゆれなびいて妻はきっと独りで寝ているだろう、私を待ちかねて」

坂倉（1993：141）もカの係結びとヤの係結びの違いを「疑い」と「問い」として特徴づけている。「疑い」とは「ある一つの懸案について結論を出しかねて、内心であれかこれかと思ひ迷うというかたちの表現」であり、「問い」とは「そういう内容を相手目当てに表明して、その解答を求めようとする表現」であると言う。坂倉によると、「…か、と疑ふ」という言い方に対して、ヤの方は「…や、と問ふ」という言い方がよく用いられると言う。

以上を纏めてみると、カの係結びの意味・機能としては「不確かな内容を自問自答すること」と言えるかと思う。

3 ム系推量の助動詞と共起するカに係結び

カに係結びが、以下の例に見られるように、ム系推量の助動詞（ム、ラム、ケムなど）と共起する傾向にあるということは、先行研究においてしばしば指摘されてきた。

秋風の 末吹きなびく 萩の花 共にかぎさず 相か（加）わかれむ（牟）（4 5 1 5）
 （秋風が 末をふきなびかせる 萩の花を 一緒に髪にさすことなく 別れていくことか）

愛しと 我が思う妹を 思ひつつ 行けばか（可）もとな 行き悪しかるらむ（良武）
 （3 7 2 9）
 （すばらしいと わたしが思うあなたを 思いながら 行くせいでやけに 行きづらいの
 だろうか）

かくしあらば なにか（加）植ゑけむ（兼）山吹の止る時もなく 恋ふらく思へば
 （1 9 0 7）
 （こんなだったら なんて植えたらう 山吹の止む時もなく 恋することを思うと）

万葉集全巻を通して、カに係結びがム系推量の助動詞である場合と、連体形の場合を数の上で比較すると表1のようになる。訓み下し文だけをみると、カームの呼応する係り結び文は下記の統計よりも多くなるが、念のため、カもムも万葉仮名での表記があるものみに留め、例文には括弧に入れて表示した。また、文末のカは終助詞と解し、統計より省いた。

表1 カーム結びのカの係り結び全体に占める割合³

カ...ム (A)		カ...連体 (B)		(A) / (A+B)
ム/マシ	2 0 3	3 0 3	1 1 5	3 0 3 / 4 1 8 = 7 8 %
ケム	2 9			
ラム/ラシ	7 1			

表1に見られるように、カがムと共起する傾向にあることがわかるが、ではなぜ両者は共起しやすのかとの疑問が湧く。ここで参考になるのが、山口（1 9 8 9 : 4 4 - 4 5）の見解である。山口は次のように説明する。

他者から応答を求める志向のない対自的疑問表現の特徴は、何よりも自力で疑念解消をはかろうとしている点に求められる。疑念らしい疑念の解消を自力ではかろうとする以上主体は十分に自問を重ねざるをえないであろう。そこで頼れるのは何よりも自身の想像力になるはずである。その強い自問の結果として提示される解答案が一般に推量語を伴うことになるのは自然の勢いであろう。対自的疑問表現の解答案は、その強い自問性を表示すべくおのずから推量語を伴うことになると考えている。

カに係り結びの「疑い」・「自問」という機能と、推量の助動詞の「想像の世界の描出」という特徴づけが、うまく噛み合わさった当を得た説明だと思う。このように、カとムの共起する場合に

については、先行研究において綿密な考察がなされている。しかしながら、共起しない場合については、必ずしも掘り下げて分析されているとは言い難い。以下、共起しない場合についても検討し、両方の場合が認識論の枠組みで統一的に説明できることを示したい。

4 ム系推量の助動詞と共起しないカの関係

カに係り結びがム系推量の助動詞を伴わない場合には、大きく次の2種類が認められた。

(1) カに係り結びが自問としてではなく、相手への問いとして使われている場合⁴

…この時は いかにしつつか (可) 汝が世は渡る (892)

(こんな時は どんなにして おまえは 世渡りをするか)

佐保川に 鳴くなる千鳥 なにしかも (鳴) 川原しのひ いや川上る (1251)

(佐保川で 鳴いている千鳥よ どうして そう 川原を愛して どんどん川を上るのか)

いつはりも 似付きてそする 何時よりか (鹿) 見ぬ人恋ひに 人の死にせし (2572)

(でたらめも 本当らしく言うものです いつの代から 見もせぬ人恋しきで 人が死にましたか)

あぜといへか (可) き寝に逢はなくに ま日暮れて 夕なは来なに 明けぬしだ来る

(3461)

(どういうわけですか 寝には来ないで 日が暮れて 夕方来ないで 明けた時分に来るとは)

カが自問ではなく、相手への問いとして使われている場合には、問いに対する相手の解答を要求しているわけで、問題になっているのは相手の知識である。それは、自問に見られるように、話者自身が想像の世界で思いあぐね、懸案するという姿勢とは根本的に違う。ゆえに、広い意味での推量という認知作用を通して、想像画の世界、あるいは設想の世界を思い描く助動詞ムと相容れず、その結果としてムが使われないのは当然なのかもしれない。

(2) は話者が確定的事実と見なしている情報が結びに現れる場合

これには、以下のごとく、結びの部分が話者の感情を表わしている場合がある。

倭文たまき 数にもあらぬ 命もて なにか (可) ここだく 我が恋渡る (672)

(物の数ではない 身でありながら なんで わたしは 恋つづけるのだろう)

秋の夜の月か (疑) も 君は雲隠り しましく見ねば ここだ恋しき (2299)

(秋の夜の 月だろうか君は 雲に隠れるように しばらく見ないと こんなにも恋しいとは)

紅の深染めの衣 色深く 染みにしかばか (蚊) 忘れかねつる (2624)

(紅の 濃染め衣のように 濃い色に 心にしみ込んだせいか 忘れられない)

「我が恋渡る」、「恋しき」、「忘れかねつる」の主体はすべて話者であり、話者自身の感情は、話者にとって自明の理である。加えて、直接体験・眼前の事態なども、話者が確定的事実とみな

す情報である。「百聞は一見にしかず」の諺に示唆されるように、話者が直接体験したこと、知覚した眼前の事態は、話者にとってはこの上なく明白な事実となる。下記の例について、「我が聞きつる」、「皺が来たりし」、「夢に見えつる」は、すべて話者自身が直接知覚を通して入手した情報である。

玉樟の 人そ言ひつる およづれ(可) 我が聞きつる(420)
(玉樟)の使いが言った 人惑わせのでたため言を わたしは 聞いたのか)

紅の 面の上に いづくゆか(可) 皺が来たりし(804)
(紅色の 面の上に どこから 皺が忍び寄ってきたのか)

門立てて 戸もさしたるを いづくゆか(鹿) 妹が入り来て 夢に見えつる(3117)
(門も閉め 戸もさしてあるのに どこから あなたは忍び込んで 夢にみえたのですか)

このように結びが確定的事実である場合、ム系推量の助動詞が欠落している。確定的事実とは、そこに疑いをささむ余地がないものであるし、想像の世界で、あれやこれやと思ひ描く性格のものでもない。それゆえ、ム系推量の助動詞の欠落は至って自然だと思われる。

しかし、その一方で、確定的事実だと思われるのに、ム系推量の助動詞が結びに使われる場合もある。次節では、その点について考察したい。⁵

5 「確定的事実」と共起するム系推量の助動詞

ム系推量の助動詞が「確定的事実」と共起する場合は(1)現在推量のラムが概ね現在の原因推量を表わす場合、(2)過去推量のケムで受け、話者の後悔の念を表わす場合、(3)反語の場合が見られる。以下各々の場合を例文と共に見ていきたい。

(1)現在推量のラムが話者自身の感情・判断・直接体験を表わす場合は集中15例拾えた。概ね原因推量を表わすと見てよい。

まず、下記の例のように、カが已然系を受ける場合、起点(原因)のカラ節を受ける場合、あるいはミ語法を受ける場合などがある。⁶

今更に妹に逢はめやと思へか(可)も ここだく 我が胸 いぶせくあるらむ(将)(611)
(いまさらに あなたに 逢えないだろうと 思うせいでしょうか こんなにも私の胸が晴れ晴れしないことです)

み吉野の秋津の宮は 神からか(香) 貴くあるらむ(将有)(907)⁷
(このみ吉野の 秋津の宮は 神の御心ゆえ 貴いのだろうか)

ぬばたまの夜を長みかも(鴨) 我が背子が夢にし 見え反るらむ(良武)(2890)
(ぬばたまの)夜が長いからか あの人が夢で何度も 何度も現われる)

当然のことながら、「我が胸いぶせくある」、「貴くある」、「見え反る」は確かに話者自身の感情・判断・直接体験である。しかしながら、ラムの推量の対象となっているのは、そのような確定事実ではなく、原因・結果の因果関係だと思われる。構文的に言えば、ラムは述語句のみ

に係るのではなく、原因節を含めた全体に係っていると思われるのである。それゆえ、本来ならム系推量の助動詞の付かないところ（4節2参照）に、付いているのだと考えられる。

加えて、以下のように、力が不定語を受け、不定の原因・理由を追及するものもある。

何すとか（可） 一日一夜も 離り居て 嘆き恋ふらむ（良武）（1629）

（何でまた 一日一夜も 離れていて 嘆き恋しがるのか）

熱田津に 舟乗りせむと 聞きしなへ 何か（可）も 君が見え来ざるらむ（將有）

（3202）

（熱田津に 舟出をすると 聞いたのに どうして君は お見えにならないのだろう）

以下のように、原因推量でない場合も見える。しかし、これらもラムが「出で反る」、「年は経ぬ」のみに係るのではなく、「神代にか出で反る」、あるいは「幾代までにか年は経ぬ」全体に係ると思われる。そうなると、不定語の存在ゆえ、命題全体としては不確かな情報と言わざるをえない。ゆえにラムが付いていると考えられる。

ひさかたの天照の月は 神代にか（加）出で反るらむ（等六）（1080）

（空に照る月は 神代の昔に立ちかえって 出なおして 来るのだろうか。）

白浜の 浜松の木の手向くさ 幾代までにか（箇）年は経るらむ（濫）（1716）

（白波の寄せる 浜辺の松の木の 手向けの品は 何年ぐらい 年を経たものだろう）

（3）ケムで受ける場合は集中8例ほどあった。以下全例を示す。

見まく欲り 我がする君も あらなくに なにしか（可）来けむ（計武）馬疲らしに（164）

（逢いたいと 思うあの方も いないのに 何で来たのだろう 馬を疲れさせになのか）

なのりそが などか（可）も妹に 告らず来にけむ（計謀）（509）

（なのりそ でもないのに どうして妻に わけも 話さずに来たのだろう）

なかなか 黙もあらましを なにすとか（香） 相見そめけむ（兼）遂げざらまくに

（612）

（いっそのこと 黙っていればよかった 何のために逢いそめたのだろう 思いを遂げることはできないだろうに）

思ひ絶え わびにしものを なかなか になか（何） 苦しく 相見そめけむ（兼）

（750）

（あきらめて しょげていたのに かえって なんて苦しいほどに また逢いはじめたのだろう）

みなの腸 か黒き髪に 何時の間か（可） 霜の降りけむ（家武）（804）

（みなの腸のように 黒い髪に いつの間に 霜が降ったのか）

かくしあらば になか（加）植ゑけむ（兼） 山吹の 止む時もなく 恋ふらく思へば

(1907)

(こんなだったら なんて植えたそう 山吹の止む時もなく 恋することをおもうと)

そき板もち 葺ける板目の あはざらば いかにせむとか(可) 我が寝そめけむ(兼)

(2650)

(そき板で 葺いた屋根の 板目のように あわなかったら どうするつもりで わたしはあの人と寝初めたのだろう)

なかなか なにか(可) 知りけむ(兼) 我が山に燃ゆる火の気の よそに見ましを

(3033)

(なまじっか なぜ知り合ったのか わたしの山に 燃える煙のように 遠くから見ればよかった)

804の歌を除き、全例に共通するのは「～するつもりではなかったのに、どうして～したのだろう」という後悔の念である。804にはケリの気づけの意味合い、「髪の毛が白くなったことに今気づいた」という気持ちが窺える。成立事実ではあるが、事実として認めたくないという心情、あるいは成立事実を前にした戸惑いが感じられる。そして、それらがケムの共起を促したと思える。

(3) 反語の場合は、例えば次のような場合である。

な思ひと 君は言へども 逢はむ時 いつと知りてか(加) 我が恋ひざらむ(牟) (140)

(思うなど あなたは言うが 今度いつ逢えると わかっていたら こんなにまでも恋しくは思いません。)

うちなびく 春の柳と 吾がやどの 梅の花とを いかにか(可) わかむ(826)

(うちなびく) 春の柳とわが家の 梅の花とを どうして 区別できようか⁸

十五日に 出でにし月の 高々に 君をいませ 何をか(加) 思はむ(将) (3005)

(十五日に 出て来た満月のように 高々に待った あなたを迎えて 何を思い煩いましょう)

磯城島の 大和の国に 人二人 ありと思はば 何をか(可) なげかむ(将) (3249)

(磯城島の) 大和の国に あなたのような人が ほかにも あると思ったら 何を嘆こう)

反語とは、そもそも話者が、確信する原案を故意に否定的に打ちだし、問うことにより、原案の正当性を強調するという心的作用のもとに成り立つものである。つまり、疑問の形をとってはいるながら、問われている内容は、話者にとって迷いなく否定されるものである。例えば、上記140に関して言えば、「逢う時がいつか知っているから、恋しく思わないだろう」は偽で、その逆の「逢う時がいつも知らないで、恋しく思うのである」が真なのである。字面に表われている内容は、「であろうか」と思いあぐねる内容ゆえ、確かに「推量」・「設想の語尾」という特徴でけと合致する。しかし、含蓄された内容は、「そうではない」と話者が確信する内容ゆえ、「推し量る」という意味にはそぐわない。この点に関し、従来論議がなかったが、ムを非事実の

世界を描く語尾と考えると合点がいく（次節参照）。⁹ 万葉集中、反語に解せるもので、ムと共起しない例がほぼ見当たらないのもうなずける。

以上、カの係り結びをめぐる、ム系推量の助動詞との共起という観点から考察してきたが、カ
の係り結びをめぐる種々のタイプを体系的に捉える意味で認識論的分析が有効である。

6 認識論的分析

Akatsuka(1985)と赤塚（1998）では、これまで論理学志向の分析では解けなかった種々の
条件文、factivityの概念だけでは説明不可能だった日本語補文標識の選択、各種言語に見られる証
拠性などを説明するために、下図のような認知スケール、ならびに話し手の心的態度を提唱して
いる。事実の世界と非事実の世界は断絶しているのではなく、連続線上にあると見ている。

認知スケール (Epistemic Scale)

事実の世界 REALIS		非事実の世界 IRREALIS
1-----0		
(Xであることを 知っている)		(Xであるとは、今の今ま で知らなかった)
		(Xかどうか わからない)
		(Xではないことを 知っている) ↑
		↓ 反事実

「Xであることを知っている」という心的態度で表わされる主観的事実と、「Xではないことを
知っている」で表わされる主観的反事実を二極とし、「Xかどうかわからない」と「Xであるとは、
今の今まで知らなかった」の二つの心的態度が、共に非事実の世界の現象として位置付けられて
いる。とりわけ、発話の場での新発見である「Xであるとは、今の今まで知らなかった」が非事
実の世界の現象として位置付けられているのが重要である。以下、赤塚（1998：31）を参
照されたい。

「発話の場で初めて話し手の意識のなかに入った情報は、たとえ話し手その場で真と
信じて、その瞬間にはまだ非事実であるということである。このことを実証するのは
、(49)のような日英語の条件文の存在である。病院に入院している友達を見舞い
に行った人の心境として、(49)を読んでみてほしい。

(49) (とても喜んでる友達を見て)

こんなに喜んでくれるんだったら、もっと早く来ればよかった。

If he is this happy to see me, I should have come much earlier.

話し手（思考者）は相手がこんなに喜んでくれるとは、今の今まで予期していなかつ
たのだ。だから、この条件文の前件は意外な出来事に対する驚きを、後件は後悔を表
わしている。

赤塚の認知スケールは、上記構文を越えて射定距離の長いもので、カの係り結びと推量の助動
詞の個々の意味・機能の間に関連性を見出す糸口を提供するだけでなく、両者の共起の様相を

統一的に説明するのも有効であると考え。認知スケールに照らしてみると、カもムも非事実 (Irrealis) に属する現象を取り扱うものとも言える。例えば、『時代別国語大辞典—上代編』(1967)によると、上代語のカには次のような機能があるとされている。

自問的詠嘆 (文末)

秋の野を朝行く鹿のあとも無く思ひし君に逢へる今夜か (香) (1613)

(秋の野を 朝行く鹿のように 何のあてどもなく 思っていたあなたに 逢えた今宵です)

疑問 (疑い)

三河の 二見の道ゆ 別れなば 我が背も我も ひとりか (可) も 行かむ (将) (279)

(三河の国の 二見の道で 別れたら あなたもわたしも ひとりで行くことであろうか)

願望・希求

吾が命も 常にあらぬか (轍) 昔見し 象の小川を 行きて見む為 (332)

(わたしの命は いつまでも あってくれないものか 昔見た象の小川を行ってみるため)

反語

磯城島の 大和の国に 人二人 ありとし思はば 何か (可) なげかむ (将) (3249)

(磯城島の) 大和の国に あなたのような人が ほかにも あると思ったら 何を嘆こう)

では、具体的に、上記機能は認知スケール上に、どう位置付けられるだろうか。思うに、詠嘆とは、ある事態に遭遇し、驚き、そしてその結果として醸し出される感慨である。その意味でも、過去の助動詞ケリのもつ詠嘆性を気付きから派生するとする説は妥当である(大野・丸谷1980; 赤塚1998; Shinzato1991参照)。ゆえに、カ、の詠嘆の心的態度は、「Xであるとは、今の今までしなかった」であると考え。疑問(疑い)は「Xかどうかわからない」という不確かな態度の表出と考えられる。¹⁰ 願望・希求は「Xかどうかわからない」と「Xではないことを知っている」の中間に位置するものではないかと思われる。ほぼ「Xではないことを知っている」が、それを受け入れ難く思う心的態度から、その逆を願う気持ちへと発展したものと考えられる。反語は表面では「Xでなかろうか」との疑いの形式をとりながら、その実、その逆が真であることを明確に示唆している。それゆえ、「Xではないことを知っている」の心的態度の表明であると考え。纏めてみると、詠嘆、疑問、願望、希求、反語はいづれも、非事実の世界(Irrealis)の事象として位置付けられる。

推量の助動詞、ムについて言えば、山田(1908)の「設想語尾」という命名、山口(1991)の「想像画」という特徴づけに示されるように、ムは今だ起りえていない事態を描くのを本義とすると思われる。これは、過去の助動詞キや、完了系の助動詞(ケリを除く)が成立事実の世界を描写するのと良い対照をなす。つまり、ムの扱う事象は、認知スケールに照らし合わせて見れば、非事実の世界 (Irrealis) の事象であると言える。¹¹

以上カとムの認識のスケールにおける位置を踏まえながら、3節から5節までに取り扱ったカとムの共起の類型を整理してみたい。3節ではカとムの共起構文を扱った。カとムも共にIrrealisに属する現象を描写するのであるから、前出の山口の説明に加えて、上記赤塚の認識のスケールに照らし合わせても、両者の共起は自然の成り行きのように思われる。その意味で、カとムの共起が圧倒的に多いという事実もうなずける。図式化すると、以下のようになるかと思われる。

A : (非事実の世界の事象) カ + (非事実の世界の事象) ム

4節では、結びが話者にとって、確定的と思われる事象の場合を取り扱った。そのような事象は認知スケール上、事実の世界の事象と捉えられるため、非事実の世界に関わるムと共存できない理由も容易に納得できる。次の図式化を比較されたい。¹²

B : (非事実の世界の事象) カ + (事実の世界の事象)

4節と一見矛盾するかと思えるのが、確定的と思われる事象を結びにとる5節である。5節の場合は、そのほとんどがラムで結ばれる原因・結果構文か、ケムで結ばれ、話者の後悔の念の強く表出された構文、あるいは反語であった。ラムの場合は、ラムが述語部分のみにかかるのではなく、命題全体にかかるとした。つまり、原因・結果の双方を合わせた命題全体である因果関係が不確かな部分であり、「Xかどうかわからない」の心的態度を表出していると考えた。以下の図式化を(B)と比較されたい。

C : [(非事実の世界の事象) カ + (事実の世界の事象)]ラム

ケムの場合は、ケムの受ける事象は確かに事実ではあるが、それは今だ話者の中で受け入れ難く思われていることである。「Xであることを知っている」と「Xであるとは今の今まで知らなかった」の中間に位置するもので、「Xであることを知っているが認めたくない」と特徴づけられると思う。ただ、Xを受け入れ難く思う話者の心的態度ゆえ、非事実の事象と見なされるのだと思う。それゆえに、図式化すると、以下のようになると思われる。

D : (非事実の世界の事象) カ + (非事実の世界の事象) ケム

反語の場合、問われている内容は話者が確信を持って否と見なす内容である。つまり「Xでないことを知っている」という心的態度に相当するものである。これも非事実の世界の事象で、次の図式化が可能である。¹³

E : (非事実の世界の事象) カ + (非事実の世界の事象) ム

ここで、AからEまでの共起の様相を認知スケールに位置づけると、次のようになるかと思われる。Dは赤塚のスケールにはないが、「Xでないことは知っているが、認めがたい」の心的態度を表明しているとする。

認知スケール (Epistemic Scale)

事実の世界 REALIS		非事実の世界 IRREALIS	
(Xであることを知っている)	(Xであるとは、今の今まで知らなかった)	(Xかどうかわからない)	(Xではないことを知っている)
↑	↑	↑	↑
B	D	A, C	E 反事実

以上、赤塚の認知スケールに基づくと、カの係り結びと推量の助動詞の共起の様相が話者の心的態度の相違として体系的に説明できることが分かる。

7 カの係結びの原形

前節では、認知のスケールをもとに係助詞カと推量の助動詞を考察し、万葉集において両者の共起が圧倒的に多いという背景には、このような認識の世界における近似性があると結論した。ここで、もう一步突っ込んで、それがカに係り結びの原形について何を示唆するのか考えたい。

野村（1995）によると、万葉集においてムが終止形終止として起る場合には、意志性の表現が405例なのに対し、非意志性（つまり推量）の場合は40例と圧倒的に少ないという。推量性を表わす場合は多くが係結びの結びとして現れるか、假定条件法の帰結部（349例）、あるいはト形式（37例）を伴ってあらわれると言う。この統計的観察をもとに、野村（1995：6）は「ムのカ・ヤとの共起構文の多さは、相当程度ム自身の要求ではないかと思われる」と主張する。¹⁴

沖縄方言には上代語のカの係結びに相当すると思われるガの係結びがある。下記の例に示されるように、このガの係結びは自問の疑問表現をつくる点、結びが話者の推量を表わす点など、機能的に上代語のカの係り結びに酷似しているが、結びが連体形ではなく、未然形である点が異質である。

通常文

?arce nama sjumuci judoon (=終止形)

(あの人は今昔物を読んでいる)

係結び文

?arce nama sjumuci judoora (=未然形)

(あの人は今昔物を読んでいるのかな)

ただ、Serafim&Shinzato（1999）で論じられているように、未然形というのは、もともと未然形+ムで、ムの脱落により生じたと考ええると、両者の機能の類似性、ならびに形態的、音韻的変遷が難無く説明できる。¹⁵ そもそもカとムの共起の多さとは、日本祖語におけるカに係結びの姿をカ...ムとして示唆しているのではなかろうか。その意味でも、ムとカとの共起をム自身の要求と捉える野村の主張は正しいと思われる。¹⁶ 沖縄方言のガの係り結びがほぼ例外なく、未然形で結ばれるという事実を考慮する時、カに係り結びの原形（つまり日本祖語）はカ...ムと考えるのが妥当だと思える。

8 おわりに

本稿では、万葉集を資料にカに係り結びと推量の助動詞ムの共起について考察した。そして、共起の様相が赤塚の提唱する認知のスケールを用いると、体系的に説明できることを示した。

角度を変えて見ると、認知スケールの底辺を貫く、Benveniste（1971）の主観性の概念（

今という瞬間における意識の主体と定義される)が、いかに奥行き深いものであるかも示せたかと思う。また、Benvenisteの主観性の概念は国語学の「今、ここ、私」の概念にも近いと思われ、期せずして東西の言語学で注目されている事実を目のあたりにすると、その重要性を再認識させられる思いがする。¹⁷

参考文献

- Akatsuka, Noriko. 1985. Conditionals and epistemic scale. *Language* 61: 625-639.
- Benveniste, Emile. 1971. *Problems in General Linguistics*. Coral Gables: University of Miami Press.
- Hangstram, Paul A. 1998. *Decomposing Questions. Ph.D. Dissertation. MIT*
- Maynard, Senko K. 1995. Interrogatives that seek no answers: exploring the expressiveness of rhetorical interrogatives in Japanese. *Linguistics* 33: 501-530.
- Quinn, Charles, J. 1997 On the origin of Japanese sentence particles *ka* and *zo*. *Japanese/Korean Linguistics* 6, eds. John Haig and Ho-min Sohn, pp. 61-89. Stanford: CSLI.
- Serafim, Leon A. and Rumiko Shinzato. 1999. Reconstructing the Proto-Japonic kakari musubi *ka.-(a)m-wo. (Presented at 199th annual meeting of Linguistic Society of Japan)
- Shinzato, Rumiko. 1991. Where do temporality, evidentiality and epistemicity meet? – A comparison of Old Japanese –*ki* and *keri* with Turkish –*di* and –*mis*, *Gengo Kenkyuu*, no. 99: 25-57.
- Shinzato, Rumiko. 1998. *Kakari musubi*: Its functions and development, *Japanese/Korean Linguistics* 8, edited by David Silva, pp. 203-216. Stanford CSLI Publications and SLA.
- 赤塚紀子 1998 「条件文とDesirabilityの仮説」『モダリティと発話行為』(研究社出版)
- 内間直仁 1994 『琉球方言助詞と表現の研究』(武蔵野書院)
- 大野晋・丸谷才一 1980 「対談 和歌は日本語で作る」『日本語の世界1 付録』(中央公論社)
- 大野晋 1993 『係り結びの研究』(岩波書店)
- 大鹿薫久 1991 「萬葉集における不定語と不定の疑問」『国語学』165
- 尾上圭介 1982 「文の基本構成・史的展開」森岡健二、宮地裕、寺村秀夫編『講座日本語学』(明治書院)
- 坂倉篤義 1993 『日本語表現の流れ』(岩波セミナーブックス45 岩波書店)
- 高山善行 1988 「<係り結び>と<推量の助動詞>」『語文』51
- 竹内美智子 1977 「助動詞1」『岩波講座日本語7文法2』岩波書店
- 野村剛 1991 「助動詞とは何か―その批判的再検討―」『国語学』165
- 野村剛 1995 「ズ、ム、マシについて」『宮地裕・敦子先生古希記念論集 日本語研究』明治書院
- 野村剛 1997 「三代集ラムの構文法」『日本語文法体系と方法』ひつじ書房
- 山田堯二 1989 「疑問表現の推量語」『国語と国文学』66
- 山田堯二 1991 「推量体系の史的変容」『国語学』165
- 山田孝夫 1908 『日本文法論』(宝文館)
- 上代語編集委員会 1967 『時代別国語大辞典 上代編』三省堂
- 小島憲之、木下正俊、佐竹昭広 1975 『日本古典文学全集 萬葉集 1-4』(小学館)

注

¹ 本稿における万葉集の現代語訳は、断わりがない限り、小学館『日本古典文学全集 万葉集巻1-4』による。

² 表記ならびに現代語訳は大野(1993)による。同じ万葉歌が坂倉(1993:167)にも取り上げられている。坂倉は両者の意味を明快には説明できないとする。

³ ムはケム、ラム、マシの一部となっているとの通説に従う。山田(1991)も参照されたい。それに、東国方言のナモ(ラムの訛り)も加えた。

⁴ 古事記の訓み下し文にも同じような傾向が認められる。ムとの共起のないカの関係び文は古事記全巻を通して17例ほどあるが、15例は確実に相手への問いとなっている。

⁵ 大鹿(1993)にも同じような見解が見える。ただし、確定的であるのに、ムとの共起がある場合については掘り下げて述べられていない。

⁶ 野村(1997)にも同じく15例収集とある。

⁷ カラをカが受ける場合は集中4例あった。以下の2例を含めて、3例はムと共起しているが、

国からか(鹿) 見が欲しからむ(将右)(907)
(国からゆえ、見飽きないのだろうか)

神からか(加) 見が欲しからむ(910)
(神の御心ゆえ、なお見たいのだろうか)

次のように話者の感情を表出していながら、共起しない場合もある。

玉藻よし 讃岐の国は 国からか 見れども 飽かぬ(220)
(玉藻よし) 讃岐の国は 国柄のせい か 見ても飽きる事がなく

同じく、ヤを使った次のような例もある。

振り投げ見れば 神からや そこば 貴き 山からや 見が欲しからむ(3985)
(振り仰いでみると、鎮する神の格のせい か 非常に尊く、山の格のせい か たいへん人を引きつける)

⁸ これは小学館『日本古典文学全集 万葉集巻1-4』では反語と解されているが、『時代別国語大辞典 主代編』では疑問に解されている。ここでも疑問と反語の認知的近似性が示唆される。次節の認知スケールを参照されたい。

⁹ 従来の研究では、反語の談話機能についての論も少ない。なぜ、真と確信する内容を全面的に打ち出さず、反語のようにまわりくねった論法を使うのかという点に関し、まだ納得のいく見解が得られていないように思う。Maynard(1995)は、その点を掘り下げた数少ない論稿の一つである。

¹⁰ 前掲赤塚論文は英語の疑問文と感嘆文の構文上の類似性、さらに推量の助動詞「だろう」が感嘆文に現れることを指摘した点でも注目される。

¹¹ 野村(1997)参照

¹² 竹内美智子(1977:92)にも同じ様な見解が見える。

¹³ 反語と反事実条件文とは幾多の類似点がある。これについては、稿を改めて考察したい。

¹⁴ 筆者の調査によるとカームの用例は304例、ヤームの用例は118例で、ムは圧倒的にカ結びに多く使われている。ヤームは類歌の多い巻10、11、12に集中している。

¹⁵ 他に内間(1999)を参照されたい。

¹⁶ ただし、野村の結論はカの関係びの原形を坂倉同様、喚体句とするという方向に進展しており、結論は本稿とは異なっている。詳細は野村(1997)参照

¹⁷ 国語学の概念については野村(1991)参照